

報



會

會 岳 山 本 日

57

月 五 年 一 十 和 昭

山 小 屋 の 遭 難

山形高等學校山岳部は藏王山三寶荒神山の西方に持つコーボルト・ヒュッテの閉鎖に關する聲明書を發表した。即ち今後は山岳部關係者専用のものとして、一般登山者に對しては堅く閉鎖してその使用を禁ず、といふ次第である。

その理由は別項(五頁参照)聲明書にもある通り、一般登山者の激增に伴つて部員の利用に支障を來すと同時に、多數登山者の收容不可能の點と、ヒュッテ使用者の不徳行爲、即ち故意の破壊、備品の盜難、使用料の不拂、使用規定の蹂躪等が擧げられて居り、出火に對する危惧益々切實ならんとす、とまで書かれてゐる。

山小屋の遭難—登山者の山小屋に對する不徳行爲は、從來も北アルプスを始め、各地の山小屋に於て屢々聞くまことに苦々しい言葉であつた。今度の山形高等學校山岳部の發した聲明の如きは、夙に聞くべくして今日まで聞かれなかつた言葉である。他の幾多の山小屋所有者からこの様な問題は幾度か繰り反えされ言はれては來てゐるが、聲明書を發して、一般開放の放棄を叫んだのは今回のこのコーボルト・ヒュッテが嚆矢であると思ふ。

この聲明を發するの止むなき事情にまで至つた、山小屋管理者の立場

は同情に餘りある。我々もこの問題の解決には大きな義務があり、山登りをするもの全體が眞面目に考へるべきことであると思ふ。

×

此の機會に、山小屋遭難の實例を少し擧げてみる。

學校山岳部、或はクラブ所有の山小屋は部員の使用を第一義として、年々その數を増して行くが、第一の問題として悩むのはその管理、監督である、嚴重なる使用規定と手續を定め、平時は鍵をかけ、豫め申込者に對して使用を許可し、鍵を貸與するの多くの例となつてゐるが、無斷使用者の數は到底豫め許可證を求める人の比ではない。無斷使用者で事後届出をして了解を求め、小屋料を支拂ふ登山者が何人あるかは甚だ疑はしい。不徳漢は貴重なる燃料の亂費は勿論、食料があれば食べ放れて持去る者さえある。

最近上越境のあるヒュッテから食料を持出し、歸途の列車中で食べてゐる最中を、そのヒュッテ所有者の一人に發見されたといふ事實を聞くに至つては全く言語道斷の極みである。

麓峠の下の東京文理科大學山岳部の白樺ヒュッテも、不徳漢の跳梁に堪えきれず、山日記所載の同小屋使用規定中には、特に一般登山者の使用は原則的に禁止し、申込者に對し審議の結果許可する事あるべしとい

ふ但書を附して今日に及んでゐる。而も今日、尙、堅牢な鍵をかけ窓には丈夫な金網を張つてきえ、無斷の闖入者を防ぐ術はないといふ状態にある。

仙ノ倉山の北麓法政大學山岳部所有の毛度澤小屋は、麓峠越えの通路に面してゐる前述の白樺ヒュッテに較べれば、谷の奥に在り、通りすがりの不徳漢の被害は免かれるものと樂觀してゐたのであつたが、結果はやはり同じであつた。入口の鍵は固く閉められてあつても、ピッケルといふ利器を用ひて輪鍵ごと抜いて侵入し、歸りには又柱に打込んで行く者が多數にある。その結果今日では鍵を打付けてある柱の面は穴だらけで、全く用をなさない。

冬の富士で吉田口七合何勾かの小屋が破壊され吹雪の中を、その小屋の持主が人夫をつれて馳せ登り、釘付をしてゐるのを數年前に目撃をした事がある。夏までそのまゝにして置けば山開きには雪がギツシリと吹込んで使えなくなると思へば、あの吹雪の中の修理は致し方ないものであらうが、その損害の賠償を負ふものは誰か。

立山彌陀ヶ原の小屋の冬季公德販賣といふ制度も古いものであつたが結果は言ふまでもなく失敗であつた。今では冬、春の登山者の多く入る頃は一様に番人を置くやうになつたのも單なる營業政策ばかりとは考へられない。北アルプスの山小屋經營者

は既に山小屋遭難の唯一の防止對策として小屋番常置といふ結論を發見してゐるのではなからうか。

×

夏の北アルプスで營業小屋に泊る登山者の中には金さき拂へばお客様だと思ひの儘に振舞ふものが尠くない。番人のない小屋と見れば無料小屋と勝手に考へ種高小屋の如き「冬季登山者に告ぐ」といふ料金表、及支拂先の住所氏名の書いた大きな木札をさげてゐるが、之さえ効能がないと聞いては全く情ない次第である。

山は單なる技術の練磨のみを目的とする處でもなし、又、恥のかき捨て場でもない。社會道徳が都會だけにあるものでなからう。改めて山の道徳を叫ぶ時代でもないと思ふが、コーボルト・ヒュッテ閉鎖に關する聲明を讀んだ機會に山小屋遭難といふ問題を持出した次第である。これを機會に山小屋所有者から不徳漢より受けた被害の實例を出来るだけ多く、日本山岳會へ報告されたい。何れにしても我々としても何等かの方策を考へ出さねばならないことは明白なことである。(角田)

第七十三回小集會通知

日 時 來る六月四日(木)午後六時
場 所 赤坂溜池・三會堂
講 演 內蒙古の風物(幻燈使用)

江上 波夫氏

五月のメドレイ

尾崎喜八

去年の十二月二十三日には、其日以後「疊の目ほど伸びてゆく」晝間のために、私たちは毎年の行事としてゐる太陽の祭をした。食卓の大皿の上では鰯と香味料とを詰物にしたカボチャが、食慾をそゝる温かい湯氣を上げてゐた。落葉を狩り立てゝ戸外に騒ぐ冬の季節風も何のその、初生りを探つて貯へて置いたそのカボチャは、晴れやかに暑い夏の田舎のひろがりを思ひ出させるに充分だった。其のふつくり落れた瓠果にナイフを入れれば、待ちかねた子供は手を拍つて喜び、成功した料理のために妻は安堵の色をうかべ、秘められた夏の光輝はそこら一面に花咲いた。さらさら光る葡萄酒は、ポアトウ、サントンジユ、ガスコーニュと、佛蘭西の南西諸州にひろがる廣大な葡萄酒の丘陵や、熱い石灰岩地に陰照する羅馬時代の廢趾や、ドルメンを圍む森松の林や、そこに照る盛夏初秋の深遠な日光や、潮風がほるアルカッションの濱邊や、さては大西洋の空の色や水の廣袤を想させるのだつた。私たちは銀紙をむきながら、一きれのチイスに瑞西の牧場を思つた。また引裂くパンには、七月の野に波うつブロードの麥の穂を見、そこに響くとりいれの鎌の音を

聞いた。最後にすゝる珈琲は太陽の集であるアラビアからの物だつた。私は酔つてシューマンの「ソネンシャイン」を歌ひ、ゲーテの西東詩集の一篇を讀んだ。子供も浮かれて佛蘭西の童謡「蜻蛉」をグラチオーゾに歌ひ、「葡萄のとりいれ」を「生氣をもつて快活に」歌つた。妻は残り物を自分の口で整理し、夫と子供との上機嫌な歌を傾聴し、幸福な牝鶏のやうに膨れて満足してゐた。そしてこれが、其の爲に私たちが普段から幾らかの用意をして置いた冬至の太陽祭の饗宴である。

其時からすでに四ヶ月餘りが経過して今は五月。晝間は四時間以上も伸びて、南中する太陽は子午線を七十三度なかにがしまで昇つてゐる。そして今度は私たちの方へ太陽から視はれる時が来たのである。

太陽よ！五月に君は何を持つて来た？

俺は先づあまねき光と、快適な氣温と、あををした南東の風とを持つて来た。それから豊富な雲で絢爛な青空を持つて来た。さういふ事のために、俺は大陸の北や南の大きな搖籃で高氣壓と低氣壓とを育て、しかも彼等があまり成長しない内に順々に東の方へ旅立たせたり、又手

をのばして遠く太平洋の水を冷やしたりするのだ。

かういふ季節の先觸れとして、俺は先づ燕の使節を送つた筈だ。それに續いて後から後から、いろいろな鳥共が現れたに違ない。彼等を食はせるには蟲が居なくてはならない。だから俺は冬眠の蟲共を追出して産卵させたり變態させたりする。しかし又其の蟲共も餓えさせてはならないから、俺は草木の芽を綻ばせ、柔かい枝や莖を伸ばさせ、こんもりした新緑をしたゝらせ、色も形もさまざまな花を咲かせるのだ。しかし斯うした彼等が互に食はうが食はれやうが、それは彼等自身の事で俺のことはつた事ではない。俺の願は彼等一切の生物が其の運命を生き抜く事だ。俺の持つて来たのは生だ。歡ばしい生、奮闘に價する生、悔いる事の無い生だ。あゝ、俺の創造する此事業にあづかつて、酔へるが者のやうに生きる者達こそ視はれるがいい！……

それで今や五月の天地に日光は燦としてあまねく、海からの南風は遠く都會の空にアドバルーンを傾かせこゝ田圃の廣がりに涼しい麥の穂波を走らせ、あらゆる樹々の新緑をさわさわと鳴らしてゐる。

田舎の夜明け、空は露でも滴つて来るかとばかり柔かく青い。屋根のまはりでは雛を育てゝゐる雀の夫婦が幾組も、一年中で最も水々しい聲を張上げて話をしてゐる。昨夜晩く

オホコノハヅクが甘やかに鳴いてゐた森の松の木の天邊では、今朝は尾長の群が「ゲイー・ゲイー」と鳴きながら、その美しい空色の尾を揺すつたり飛廻つたりしてゐる。南方の越冬地から中部の山岳地方へ歸る途すがら、昨日此林へ立寄つて一夜を明かしたらしい黄ビタキが、背中と喉を鮮黄色に彩つた黒装束で、眞似も出来ないやうなメロディーを其の豊麗な笛で吹き鳴らしてゐる。同時に林の中は金蘭と銀蘭との花盛りの時である。木立の中を歩いて行くとこれから段々多くなる蛾の先驅が飛出して草の中や幹の間へ身をかくす。

中央を用水の小川が流れてゐる水湿地へ出ると、一帯の葦原はオホヨシキリの「ギョギョシ・ギョギョシ」の歌で満たされてゐる。彼等はもう一週間ばかり前から此處へ到着して營巢に都合のいいくらゐ葦の伸びるのを待ちながら終日歌ひ暮らしてゐるのである。四尺ばかりに伸びた其の葦の中では、しかし既にヒクヒナが巢を初めたらしく、あの小刻みに刻みながら次第に絶え入るやうに消えてゆく寂しい美しい歌を歌つてゐる。

向うの丘から「キヨロリ・キヨロリ・キヨロリ・キヨロリ」と、豊かな、つやのある木管樂器の音が響くのは鶉である。冬中居残つた彼等はもうちぎ北の國へ歸るために別れの歌を聴かせてゐるのであらう。見

上げる空中を「ヒリヒリン・ヒリヒリン」を鳴きながら飛んで行くのは今裸の木の股に營巢の最中のサンシヤウキヒである。

やがて太陽が出て水邊の霧を拂ふするとギンヤンマ、シホカラトンボヨツボシトンボ、カハトンボの群が最初の陽光を浴びて飛び初める。蛙が鳴く。巢の數物にとて鴉がツバナを摘みに来る。そして農家の子供がこつそり他人に氣づかれないやうにビンドウを沈めに来るのも此時間である。そして又遙か向うの私の家で朝日を浴びた窓が金色の花のやうになるのも此時間である。

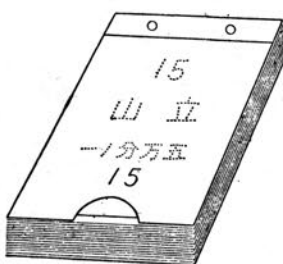
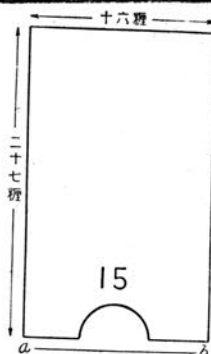
地圖整理の二方法

法貴 六衛

岳人にとつて地圖の必要なことは言ふまでもないが、之が整理を怠る時は、いざ山行となつて目的地の地圖を出さうと思つても持つてゐた管のものが取出不せないで困却することがある。私は自家考案の方法で之を整理し大いに便宜を得てゐる。

其方法は寫眞のフィルム陰畫紙用アルバムを利用したものゝ過ぎない。即ち第一圖の如く縦二十七欄、横十六欄の距形をした袋を作る。紙質はバラフィン紙かセロファン紙のやうな半透明乃至透明の丈夫なもの

を用ゆる。(半透明乃至透明なものを用ゆる理由は後でわかる) a-bの所は地圖の入口口であるから中央に半圓形の切込みを入れ開いたまゝにしておく、恰も底のない封筒のやうなものである。之を澤山作つて前記フィルム原板入れのやうに製本した



ものが第二圖である。この際スクラップ・ブックやアルバムと同様に地圖が袋に入る厚味を増すから背(とち目)の方はそれだけ厚くすること忘れてはならぬ。

次に各袋に順次番號を入れる。この袋は陸測地圖のハツ折が恰度入る大きさなので地圖の裏面に地名、地圖の縮少度、入れる可き袋の番號を書いて第二圖のやうに袋の中に納める。地圖の折り方を一定しておくこと常に一定の裏面に之等の文字が出て

来る。半透明乃至透明の紙なので文字は袋の上から明らかに讀める。

一方陸測地圖(一覽表)(陸地測量部發行地圖區域一覽表)を用意して各地方名の區劃の脇に其地圖の入つた袋の番號を入れる。之は赤インキを用ひたが見易くてよい。例を北アルプスにとつて見ると「立山」五萬分の一は廿五號、乗鞍嶽五萬分の一は十八號、「高山」二十萬分の一は四十五號の袋に入つてゐると云ふやうなもので、所要の地圖はこの番號を見て袋から取出せばよいのである。

我々は多く目的の山を中心に、必要に應じて地圖を求める場合が多く其地方全部を求めることは少い、從て之が整理を怠ると二重買ひをすることがあるが、こうして整理しておけばかかる過失から免れることも出来る。私は數年來この方法で整理してゐるが、一々所有の地圖を書止めておく必要なく一見して所有の地圖が判明し且其散佚を防ぎ急ぎの時も直ぐ出せて中々便利である(昭和十一年三月四日)

雜誌山岳の化粧裁希望

犬飼 哲夫

山岳は餘程以前から發行の際に假綴のまゝ縁を裁たずに會員に配布されてゐるが、私としては事情が許せば是非化粧裁と稱して縁を裁つて直ぐ讀める様にして配布して頂き度

い。先づペーパーカッターを探して一々切つて行く煩雜さと、甘く切れない不快と、切角切つた上旬は室の中に小さい紙の縁が散亂するのが厭さに達讀むことが億劫になつて終ふ一寸の旅行の慰みにと携出しやうと思ふて先づ切ることの煩雜から他の讀み易い書物を持ち出す。これは特に私の様な無精者の云ふことかも知れないが、少くとも激忙中に閑を偷み山のことも考へて氣晴しをしやうと思ふ時に却つてイライラする氣を煽り立てられる様な感じがするから先づ製本屋に行つた化粧裁をして置く様にしたい。

私には悲しいことに本の假綴の美術感とか、歴史的意味とか云ふ高尚な考へは此頃の様には忙しくては毛頭持てない。考慮し得る美點は經費の輕減と、製本する際に必ず化粧裁をするから二重裁になり又裁ち過ぎる憂もあると思はれる。又人によつては日本の様に本屋即ち圖書館式の惡弊のあるところでは立讀防止又賣行擴大の利にもなると云ふが、そんなことは私は判らないが何かもつと當然である可き理由があつたら諸賢の御教示を御願ひし度い。そうしたらなら裁ち切つてない假綴の不快が却つて私にいい精神修養となるかもしれない。

者筆執及員委輯編
(順CBA)

編會岳山本日



版年六三九一



松黒黒黒木冠片後藤
方田田田山山藤島
三孝正初 理太 幹敏
郎雄夫子郎郎弘次男
浦角津竹下園櫻沼額
松松田内出部井田
佐田田内出部井田
美吉周 繁 信 鐵
郎夫二亮雄部雄郎敏

菊半截四〇〇頁
全般新稿大改訂
定價一圓
送料一圓
六月一四錢
梓書房發賣

主要目次

曆 曜 表
日出 没時間表
日 記 欄

登山 經歷 欄
自由 日記
住 所 欄

登山の注意
山岳氣象
冬季登山
遭難信號
登山衛生・應急手當
服裝・用具・食料
登山用品表
登山用食料目錄
地圖使用上の注意
山岳寫眞
世界山岳・峰高度表
本邦山岳・峰高度表

登山日程表
概念圖(八圖)
山小屋(六一二)
山案内(一五五)
營林署帝室林野局所在地
登山團體一覽
各國登山團體
地名解讀
山岳語彙
雲形圖版十二圖
附錄・星圖・天氣圖用地圖

引割員會

會員にして本年度「山日記」の購入希望者に對しては前號通り二割引と致す事となりまし
至急事務所に御申越願ひます
配領價 金八〇錢 送料四錢
現金取扱のこと。部數制限なし

◆會員通信◆

豊科町登山遭難者慰靈祭

近日の御打電にて小生日本山岳會を代表して豊科町に於ける登山遭難者慰靈祭に参列致し候、當日の状況は別紙の如くに有之中々盛會に候、會主よりも宜敷と申出て候。

五月八日 河野 龍藏

(以下同封新聞記事より抜萃)

御山祭は先づ午後一時から豊科町記念公園内で東京成城學院生徒小池孝、外三十四氏の慰靈祭を舉行したこの日雲低くたれ籠めて偉容を誇るアルプス連山も涙にぬれ亡き山の勇者を慰めるかに見えた遺族席には東京、大阪、埼玉等よりかつての山の勇士の父母、兄、妹等九名出席今更の如くありし日の吾子、吾兄を偲んで居る。來賓としては日本山岳會河野龍藏氏、鹽野崎縣觀協理事、小里松本市長、矢澤信濃山岳會長、三村縣議、アルピニスト山口勝氏等を始め地許各關係者案内人等二百數十名出席。

先づ西川神官の神事に次いで祭主加納豊科署長の切々肺腑を刷るる祭詞の朗讀あり、來賓縣觀光協會長代理山口勝氏、保安課長代理中澤部長地許各官公衛學校代表宮川豊科高女校長、三村縣議等次々祭詞あり大澤法藏寺住職以下の讀經裡に遺族其他の拜禮を終り、参列遺族代表として昨夏槍ヶ岳で遭難山の犠牲となつた

早大生片岡澄氏の實兄片岡勝吉氏から謝辭あつて午後二時半慰靈祭を終つたがこの頃から雨となつたため豫定を變更して、御山祭は豊科劇場内で開いた午後三時半先づ加納署長三原町長交々起ち挨拶來賓代表として小里松本市長の祝辭あり宴に移つたが、常念口案内人支部出演にかゝる登山案内演劇の劇化したもの等ローカルカラーを十分に發揮し遺族を始め來賓一同を喜ばせて居た斯して午後五時半山祭を了へ午後六時半豊科町大黒屋に於て盛大なる夜會を催し茲に全く第一回山祭は無事其幕を閉じた。

雪の阿頼度富士

關西學聯の阿頼度登攀隊はその後色々メムバーに變更がありました。漸く左の如く決定、愈々此の九日に大阪を出發することになりました。

隊員は福田源四郎、宮内一美、田中康弘、福田源五郎、大津眞一、入江保太で

日程は大體左の如くであります。

五月 九日	大阪 發
十三日	根室 發
十七日	パラムシロ着
二十日	アライト着
三十日	パラムシロ發
六月 五日	根室 發
八日	大阪 着
	入江 保太

春の富士大澤

私達は今春富士大澤口に合宿して大澤のダイレクト登攀を試みまし

た。この方面は西向きのため積雪少く、大澤は豫想通り雪崩の心配はありませんでした。落石は非常に多く殊に日が當り初めると一抱もあるやうなのが、唸りながら落ちて行きます。しかし大澤が分かれてゐる尾根の下(大體三一〇〇米)まで行けば落

石も殆んどありませんので、その大きな奴は途中の側谷から落ちて来るらしいです。一見アンサウンドに見える正面の岩壁は、登つて見てサウインドなのに驚きました。斜面は大澤の上の方は相當急で富士山中最大斜面をなしてゐると思はれます。私達の行つた時には三〇〇〇米以上は雪は氷狀となり、アイゼンの練習には好都合でした。深はその中央の尾根に

よつて二分され、その上は更に扇取にひろかつてゐて、可成りバリエーシヨナルトも取れます。大澤口五合目の小屋を根據とすれば、大澤を登つて火口壁へ行くには丁度よい一日往復の行程でした。

冬期は雪が急なため積る雪は片つぱしから雪崩れて、大きな雪崩は出ないし、又落石の心配も少ないと思ひます。しかし如何にして屢起る雪崩を避けて行くか、又特有の烈風にあふられては大澤そのものの登攀も大いに興味あらうと思はれます。

京大旅行部 杉山

銀兎岳天幕行

一行、小池、櫻井、

三月卅日 當盤香掛驛 午前八時乳川谷ノ伐採小屋(乳川の西曲する所、約一〇二〇米位) 正午。小雪散らつきしたため泊る。

三月卅一日 伐採小屋午前七時半發、八時釣魚澤に入る、釣魚澤は河渡り多きも靴を濡らすに到らず、午前十一時、五萬分ノ一地圖の釣の字の合流點、北方より落る澤を東澤と云ふ、此の邊より谷底は春雪崩にて埋め盡され、水流は現れ居らず谷幅狭きためスキー使用は如何と云ふ、一八〇〇米より上は全くスキーによし。

地圖の一九一五米獨標の百米位東方に野營始め尾根上に天幕張らんとせしが飛雪を交へた突風に惱まされ仕方なく尾根を南側に降りたる地點を撰ぶ夜、月出で麓に霞み、池田、松本の燈火見ゆ。

四月一日、朝、晴れたため外の雪上にて焚火出來、飯は早く焚けた午前八時半、早急ハ出後、今年氣候遅れ、一、二の雪は全く粉雪、冬の有様、むづ、奇カンもぐり勞役多し。二〇九〇峰にかかりたるは午前十時、正午と云ふにまだ二二〇〇米を出でず、無類の好晴に、所林帯の尾根をたどる、日向の側の雪庇の上は輪カンが雪達磨となり一步樹蔭に入れば粉雪膝を没す。止むなく、

銀兎東方直下の三又尾根(ガレの印ある)上の風蔭に天幕を張り荷物を

輕減して明日頂上小屋入りをせんと思ふ、天氣はよし、薪を集め大きな火を焚く、陽光暖く全く春の登山の伸んびりした気分に浸るを得た。ぬれ物を乾し天幕を乾した。夜、月明に起き出でて見れば、月の輪かすかにかかり、内に星三つ淡く光る。

四月二日、好晴なるも空の色、昨日よりも鈍し。朝焼けせる眞紅の太陽は東方滑間山の上空をあかく染めなす。八時、天幕は張り放し、不用品を置き、頂上へ行く、十時頂上着、小屋も使用出來る。之れにて天幕に戻らば必要なし、午後、櫻井は薪集め、余は二六四三米の南峰へ遊びに行く、ビーク三つあり悪い箇所二三あり、始めてビッケル。アイゼンの厄介になる。夜六時頃より濕氣ある雪、靜かに降り始め、更くるに及びあらしとなる。

四月三日、一日暴れ狂ふ小屋にて眠る、午後五時暗間より入陽射し外は冬景色に逆戻りする、晴も東の間夜に入りて再び吹雪となる。

四月四日、餘日無ければとて、吹雪中を下山と決す。降り口を見出すため三角點上に、約二十分、佇立す。野營地に九時頃歸着。二日間の暴風にも、天幕は健々として、散散して下山、直接、釣魚澤、源流に強引に降る。十二時釣魚澤本谷と東澤との合合に出る。二時半、乳川本谷伐採小屋泊。

四月五日、歸宅
積雪狀態、一八〇〇米以上は春の

暖氣、里の氣象の影響なく全く冬の
状態、谷底は徒渉多く、スキーに不
便なるも一五〇〇米附近より上は雪
量多く谷筋、尾根筋共にスキーの方
時間的、勞力的に經濟でありスキー
を携行せざりし事を悔ひたり。雪崩
の危険は相當なりと思惟せり。

小池 文雄

コーポルト・ヒュツテ

閉鎖に關する聲明

山形高等學校山岳部所有コーポ
ルト・ヒュツテは、昭和三年十月、當
時在校の部員の手により、藏王山三
寶荒神山西方の現地點に建設せられ
たるものにして、是が創設の目的は
一に當山岳部員の藏王山に於ける冬
期活動の根據地を得んとせしにあ
り。

爾來當部は、一般登山者の利便を
慮り、創設の目的に反せざる限りに
於て、ヒュツテを廣く開放し來たり
ヒュツテに對する世人の認知又漸く
周知からんとす。

然るに、近時藏王山に於ける冬期
登山者の急激なる増加に伴ひヒュツ
テ使用者の増大著しく、部員の利
用を第一義となす該ヒュツテは、最
早やかゝる多數者の要求を満たす能
はざるに至れり。而もヒュツテ使用
者の不徳行為漸く繁く、故意の破壊
備品の盜難、使用料の不拂、使用規
則の蹂躪等は頻々として惹起せられ
加ふるに出火に對する危惧益々切實
ならんとす。

ヒュツテの現狀既に斯の如くなる
に於て、これを從來の如く開放し置
かんか、これが維持經營は小數高
生を以て組織せられたる當部の到底
爲し能はざる所なるのみならず、當
部が是を創設し且つ多年に亙り維持
し來たれる本來の意義を其の根底よ
り失はざるを得ず。

此處に於て當部は、今後コーポ
ルト・ヒュツテを一般登山者に對して
堅く閉鎖し、當部關係者專用のもの
たらしめんとす。

山形高等學校山岳部は、大方の理
解と德義を有せらるゝ登山者に對し
かゝる處置に出づるの止むなきに至
りしを遺憾となすと雖も、前述の如
き現下の狀態に於ては此の處置の又
當然なるを堅く信じて疑はず。
依つて此處にコーポルト・ヒュツ
テの閉鎖を聲明し、併はせて大方の
誤解なからんことを期す。

五月一日

山形高等學校山岳部

臺灣遠征隊歸還

(前略) 過日當商大山岳部臺灣遠征
に際しては、一方ならぬ御鞭撻と御
厚情を忝ふし一同深く感謝致居候
以御蔭一ヶ月の遠征も何等の支障な
く終了致し去る四月十八日無事歸學
仕候間御報告旁々御禮申上候(後略)

昭和十一年五月一日

神戸商業大學臺灣遠征隊

◆新刊紹介◆

ヤングハズバンドの ヒマラヤ觀

St Francis's Younghusband
Everest: The Challenge

220x15 p.p. ix, 243. London. 1936

標題と内容が若干ちがはざるの感
がないでもない。と云ふのは直接エ
グゼレストに就いて書かれた部分は
全體の三分の一であるからだ。全體
を二部に分ち、第一部は「アドヴェ
ンチュア」、第二部は「反省」と銘打
ち、第一部では、先づエグゼレスト
に登攀すると云ふ考へが生れ、之が
實行に移されて行つた過程を述べ、
次いで前後四回に至る試登の要約を
叙して、その結果得られた結論を述
べ、更に將來の見透しを五章に互つ
て書いて居る。續いてエグゼレスト
以外の地方に於ける最近のヒマラヤ
登攀の大略を二章に分つて説明して
ゐる。先づ再度に互るパウアーのカ
ンチエンジュンガ登攀及び昨年のメ
ルクル隊のナンガ・バルバートの悲
劇を叙し、次いでカメト、ナンダ・
デヴィなど英國人の登攀隊による最
近のヒマラヤ登攀の成績を述べ、最
後の章でボーターの問題に移りヒマ
ラヤ各地の住民について叙し、各々
の種屬が登攀隊の構成員として持つ
價値を評價してゐる。そしてエグゼ
レスト試登開始以來、之等土着民の

間に登高精神を理解する能力が育て
られ、實際に登攀の伴侶として比類
なき資性を備へるに至つて來てゐる
ことを述べてゐる。

從つて現にエグゼレストの登攀報
告や最近の情勢、又は同じ著者によ
る『エゴック』などに親しんだ人々
にとつては此の第一部は餘り多くの
知識を與へないかも知れない。併し
エグゼレスト委員會成立までの経緯
などや、コンウェイのカラコラム
入り當時からアブリガ公の探検を經
て今日に至る間に人間の高きに對す
る觀念と人間の馴致力に關する觀念
の變遷などになると、流石に著者そ
の人のその發展の過程に少からぬ寄
與をしてゐる丈けに、その人の書る
所を讀むことは興味も深く、又一つ
の要約として極めて要領のいい要約
でもある。『エゴック』によく出て
ゐるヤングハズバンド一流の登山觀
乃至は登高觀が再び此處で繰返され
てゐることは謂ふ迄もない。人間の
持つ環境に對する馴致性の如何に大
なるものであるかもよく説明されて
ゐる。

第二部の「反省」百頁はヤングハ
ズバンドのヒマラヤ觀である、或は
より適切に云へばヒマラヤを通して
述べられた彼の宇宙觀である。
最初の章はヒマラヤの自然の偉大
さ多様性を説明し「歐洲人の山に對
する愛情はまだ漸く創始的段階にあ
る。殊にヒマラヤに就いて云へば、
我々は漸く近づきになり始めた程度
のものである」ことを語り、『ヒンズ
ー・グーシを除いたヒマラヤ主脈だ
けを見ても延長は千五百哩に及び、
若し之を歐洲に持つて來れば、モン
・ブランからコーカサスまでに跨る
ので……高きから云へば
二九、〇〇〇尺以上のもの 一座
二八、〇〇〇 同 三座
二七、〇〇〇 同 六座
二六、〇〇〇 同 一八座
二五、〇〇〇 同 四九座
二四、〇〇〇 同 八六座』
とその盛んな高さを述べてゐる。併
しヤングハズバンドは直ぐあとで次
のやうに書き足すことを忘れない。
『此のエグゼレストの高さを以て
しても直徑四十吋の地球儀の上では
一時の三十分の一の高さにしかなつ
てゐた。……斯う考へて見ると、
我々の此の地球なる遊星の大きさが
幾分はつきりするものであるが、之が
太陽と比べた時はまるで水の一滴に
も及ばない存在であり、然も此の太
陽が實に何百萬と云ふ澤山の恒星の
一つに過ぎないのだ』

『ヒマラヤの高さを考へて見ても
我々は萬物の大きさと云ふものを感
ぜざるを得ない。地質學者に云はせ
るとヒマラヤは比較的起源が新しい
のだが、年から云へば少くとも三千
萬年経つてゐるのである。地球上の
他の山々は大體五千萬年代の古きな
のだ。そして地球はと云ふとは二
十億年の年月を経て居り、太陽は實
に三兆年を経てゐるのである』

ヤングハズバンドの宇宙觀の出發點は此の偉大さに對する驚きにある。そして此の偉大さ高さを求めて已まない所に彼の所謂登高精神の核心がある。

ヒマラヤの自然界の多様性、偉大さを述べた彼は筆を轉じて此のヒマラヤが印度の民族に對し如何なる影響を與へ、彼等によつて如何に神々の鎮座まします所として崇められてゐるかを述べてゐる。そして又彼等に托して、筆者自身のヒマラヤへの渴仰と獻身とを告白し、聖なる山カイルアズを眼覺して難行苦行を甘受し乍ら巡禮を續けるヒンズー教徒の心境を物語り、ヒマラヤ山上に靈場を求める彼自身の境地を物語つてゐるのである。

最後の章『星月夜』で著者は専ら年來の持論である宇宙觀を論じてゐる。

『私自身はヒマラヤの偉大な頂上を登るなど云ふ經驗を持つてゐない私はもつとつまらなう、谷筋や峠の間を探ね歩いてゐたのだ。併し比較的低い所を歩いてゐた御陰で、私は野天で夜を過ごすことが出来、何週間を立續けに、毎晩々々私は山々に取圍まれ乍ら星を戴いて夜を明したのである。私はさうやつて山間に自分の行く途を求めてゐる間に、山と星とを自分の胸の中で結びつけて考へるやうになつてしまつたのである。』

『その偉大な沈黙と全くの静けさ

の中に、星の光は本當に自分の身體の中に侵みこんで来るやうな氣がした。それ等の星の輝きはそれ丈け高い所でないれば見られないやうな絢爛極まりないものであつた。……私は地球の上になつてゐたのだから依然地球上のものだつた譯だが、併し、私と山々と星とは總て一つになつてしまつたのである。晝間とは違つて太陽が獨りて照り輝いて、事物の建前を狂はせるやうなこともなく、宇宙の中の私の本當の地位も遙に明確となつた。私はたゞ太陽系だけに屬するものではなく、最早や星の照り輝く大空そのものに屬してゐたのである。斯くして、宇宙に對する、又それと我々との關係についてのより眞實の概念が私の心の中に形造られ始めたのであつた。』

之がヤングハズバンドの宇宙觀の出發點である。彼一流の神祕的宇宙觀については、彼の自叙傳『經驗の光』The Light of Experience: a Review of Some Men and Events of my Time, 1927. にも觸れられて居る。星について始めて語つたのも『砂漠横斷の記録 The Heart of a Continent, 1896. 當時のことだから古い話である。そして此の最後の星月夜の一章こそは謂はば彼の宇宙論、神祕宗教の要約であり、その意味で之を讀む時誠に興味の深いものがある。』

何か新しい知識を求める讀者には或は此の「エッセイ」一巻は失

望を起させるかも知れない。殊にエグレストに就いて書くのならば、確かに彼以上に此の山に親んだ人が澤山居る譯だから、他にまだ人は居る譯なのである。それにも拘らず、ヤングハズバンドが此の書の筆をとつた動機は矢張り『エビツク』の場合同様、之を通して登高の精神を語らうとするのであつたらう。そして此の著もその意味で受取られる可きものである。

挿畫は合計十六枚、何れも美しいものだ。併しヤングハズバンドはその序文で

『私はヒマラヤの寫眞は大嫌ひだ。實際にヒマラヤを觀た者からすれば寫眞は實物の値打をぶち壊すこと甚しいものだ。併しまだヒマラヤを見ない人々の眼には、寫眞は貧弱乍ら兎もあれヒマラヤがどんなものであるかを示すものとされてゐる。それで私は不本意乍ら、出版書肆の要求を容れて寫眞を加へたのである』と書いてゐる。併し寫眞が美しいことは事實だ。ヒマラヤを見たことのない我々には之があることは有難い話である。巻末には略圖が四つ添へられてゐる。(松方)

新刊短評

Akademischen Alpenverein München,
Willo Weizenbachs Bergfahrten
2.5×14.5 pp.: 60. Berlin 1.935

一九三四年、ドイツ、メルクル隊の一員としてナンガ・バルバート登山に加り、二名の僚友と共に悪天候の犠牲となつて第七キャンプに斃れたグエルツェンバッハを記念する一本である。A・A・V・Mの編集になるもので、遠征の僚友ベヒトルド外六氏の執筆から成つて居る。

巻頭に一九三四年十一月十二日、A・A・V・Mの追悼祭に於けるカール・グキーンンの追悼演説を掲げ、内容は四部に分けて、一、岩場のグエルツェンバッハ、二、最初の西アルプス登攀、三、氷上のグエルツェンバッハ、四、ナンガバルバートとされて居る。最後のナンガバルバートの項はベヒトルドの執筆で、他はそれぞれ、岩、氷、いづれにも優れたグエルツェンバッハについて分擔者の記述の外に、彼自身の山行記を収めて居る。

寫眞四十七葉、いづれも鮮明で、故人の果敢な登攀の跡を知るに足る興味深いもの、恐らく最近に於ける登山家傳として注目されるべきものであらう。

Girard, G. F. A Pic Dolomites.
20.5×17. pp. 32. Paris 1935

三十二葉のドロミテの寫眞とジャン・パリオの序文を持つ小さなグレイシア版の寫眞帖。特異なドロミテの岩峰を表現するのにならう苦心の跡が伺はれる。ヤロイド環綴りの瀟灑なものである。

Collet, L. W.
The Structure of the Alps
22×14. pp. xvi. 304. London
1935 (Second Ed)

ジュネーブ大學地質學・古生物學教授レオン・コレット氏の専門的研究でアルプスの構造に關する著述。既に一九二七年に上梓されたものを一部改訂して昨年第二版を出したもので、第一版に比し十五頁増加して居る。序文はケムブリッジ大學のジョーンズ教授が執筆して居る。第一版に對してアルバイン・ジャーナルの批評では(四〇卷、二一〇)學生のみならず一般讀者にとつても價値ある書であると推賞して居る。詳細な圖表が附されて居る。

Borchers, Philipp.
Die Weisse Kordillere
23×16. pp. 396. Berlin. 1935

一九三二年獨逸山岳會の南米コルドイラ・ブランカ遠征隊の報告で隊長ボルヘルスの編纂の下に同氏外八名が執筆して居る。

コルドイラ・ブランカは南米ペルウ國內にあつて延長一三〇軒、幅三〇軒の山脈で六千米を越へる高峯を並べて最高峯は六七六五米の Haus caran で勿論處女峯である。遠征隊は登攀と同時に科學的探求

にも相當の主力を用ひて居るのは、
「獨逸山岳會の傳統に従つて」とボ
ルヘルズ隊長が誇る迄もなく、隊員
の顔觸れでも了解出来るし、出來上
つたこの報告書でも證明される。

國際ヒマラヤ登山隊に参加したシ
ュナイダー、ヘルリンの外に、地理
學者キンツェル、測量者ルーカス、
醫師ベルナード、登山家ハイナが一
行である。

結果は六千米以上のピークに登頂
すること五座、五千米と六千米の間
にあるピーク、十四座、峠二つに隊
員が足跡を印した。約五ヶ月間の成
果である。

この報告書は爾來足掛け四年を経
て刊行されたものだけに大部な詳細
にわたる調査が含まれて居る。

寫眞九十八葉も珍しい地方ではあ
り、花崗岩の岩壁も多く相當な氷河
が存在して居るだけに興味を持つて
見られる。十萬分の一の別刷地圖も
貴重な收穫である。

Akademischer Alpenclub Bern

30. Jahresbericht.

Vom . November 1934

bis 31 Oktober 1935.

22×16. pp. 35. Bern. 1936

ベルンの學生山岳會の年次報告。
何時も乍ら簡單なものであるが、此
の僅三十五頁の小冊子を手にし乍ら
何となくベルンの連中の眼覺しい活
躍振りを連想せざるを得ないのは何

故であらうか。併し、それでも此の年
次報告としては内容は豊富な方で、
全頁寫眞が三頁に凸版の挿畫が二頁
も入つてゐる。會の活動の報告に始
り、山小屋、圖書、會員の登山記録
簡単な初登山報告——總計八つの初
登山の報告が五頁に要約されてゐる
——等型の如くあり、最後に會員名
簿が載つてゐる。現役メンバーは總
計十六名で、一九三五年の新加入は
僅に一人である。會員連の活躍が眼
覺しい丈けに會報があつたりしてゐ
る所などが、殊更ら興味深く感ぜら
れる次第である。

P.iley, Dorothy

(Mrs. J. A. Richards)

Climbing Days

22×15. pp. xii, 35. London. 1935

古い圖書室の署名簿を探したなら
ば或は此のリチャーズ夫人の署名が
あるかも知れない。夫人の手になる
此の本を手にして想ひ出すのは。虎
の門の圖書室でリチャーズ夫妻を眞
中に二三の山仲間と山のことや山の
本のことなどを語り合つた何年か前
のことである。北平の大學に招聘さ
れて何ヶ月かを北支に過した歸りが
けであつたので夫妻は山の話や、山
の仲間の作り出す空氣に満ちてゐた
のであらう。その歡びは大したもの
であつた。

『クライミング・デイズ』は夫人の
今日迄の登山記録を輯録したもの

で、故郷の英國の岩登り場は勿論の
こと、ピレネー、アルプス、コルシ
カ、タートラ等歐洲大陸の各山岳等
を渡り歩いた擧句が、印度、カナ
ダ、日本などと羽根を伸ばした著者
のことであるから、三百五十頁の此
の書に盛られた内容は恐ろしく多様
である。勿論歐洲外では旅行の途次
横道にそれたと云つた風の山である
が、歐洲でもリチャーズ夫妻の登
攀の記録は立派な一流所であらう。

永年の問題であつたダン・ブランド
の北尾根の登山の如きも此の夫妻
が初めて敢行してゐるが、之等は二
人のアルプスでの業績の最も著名な
一つである。婦人登山家の中で英國
内と云はず廣く歐洲で、リチャーズ
夫人が最も優れた一人であることは
云ふ迄もない。七十枚に垂んとする
寫眞は何れも美しい。岩登りものも
澤山あるがカンチエンジュンガやグ
ランド・ジャラスなどの雄大なもの
も多い。

Watson, Sir Norman & Edward

J. King Round Mystery. Mou-

tain.

22×15 pp. xii, 246. London. 1935

昨年の三四二ヶ月に亘り行はれた
カナダB・C州の最高峯ワディント
ンのスキー横斷記である。當時一行
の消息は朝日新聞でその都度報道さ
れたが、その纏つた報告が本書で
ふんだんに氷河に恵まれたカナダの
山の寫眞が恐ろしく雄大で且美しい

山岳圖書特別展覧

藤本九三氏所藏

ヒマラヤ關係文獻

關西支部事務所において
六月末日まで・日・月曜日を除き毎
日午後五時より八時まで

關西支部事務所開室日

關西支部ルームは日曜と月曜を除
くが毎日午後五時より八時まで開
室長圖書記が執務してをります。

六月中は別項の通りヒマラヤ關係文
獻の特別展覧をしてゐますから來室
者は係員に申出で御覽下さい。なほ
六月下旬に右藏書の解説講演を同所
で行ふ豫定です。日時が決れば關西
在住會員には御通知します。



關西支部事務所は大阪市北區堂島
上通一丁目大阪貯蓄ビル三階にあり
ます。堂ビルの筋向ひの角で入口は
北側點燈後は北西隅の通用門より非
常階段を二階へ上つて御出入願ひま
す。

日本山岳協會第一回展

○場所 京橋區銀座西日動ビル一階

○日時 七月一日——五日
日動畫廊



會務報告

豐科町登山遭難者慰靈祭

五月四日豐科町で登山遭難者慰靈
祭が行はれ、本會からは松本在住會
員河野齡藏氏に乞ふて本會を代表し
て出席方を依頼し、尙本會の名に於
いて靈前に供物を供へた。(別項會
員通信中河野氏來函參照)

關西支部五月定例理事會

五月八日關西支部ルームに 開催
出席者 今西錦司、三木高峯、別
宮貞俊、宮崎武夫、津田周二、富田
健一

協議・決定事項左の通り
一、自今定例理事會及委員會を毎
月第二月曜日に變更す。

二、支部委員は定員拾名のところ
現在貳名缺員あるに依り、加納一郎
富田健一兩氏を新に委員として推薦
すること。

三、支部の機能發揮並に事務處理
の敏活を圖るため委員中より常任委
員四名を選任すること。
四、その他一般事務打合。

關西支部有志懇話晚餐會

(關西在住三評議員を中心として)

四月廿八日午後六時より大阪市北区區堂島堂ビル清交社に於て、關西側三評議員今村、加賀、榎谷三氏を主賓として支部會員有志の懇話晚餐會を開催した。今村氏は差支のため缺席されたが、珍しくも石崎光瑤氏の出席あり和やかな晚餐會の後懇談會に移り、榎谷、石崎兩氏のヒマラヤに關する研究や思出話の外に、加賀氏の歐洲アルプス登山に對する面白き懷舊談等があつて春宵一夕の清談に耽り午後九時半散會した。當日出席者左の通り

評議員 加賀正太郎、榎谷徹藏
會員 石崎光瑤、中原繁之助、安藤博、三木高岑、小川正十郎、藤木九三、名古屋常治、中田伸直、國府精一、朝輝記太留、佐谷良造、富田健一、今川良夫、以上

會員有志晚餐會

五月十三日午後六時より琴平町『曙莊』にて開催

折よく京都から奥、加藤兩氏も來京中で參加、山内、佐武、高橋。廣瀬、佐藤の諸氏等有志晚餐會には珍しい方々の顔も見え、それに小島、高頭兩名譽會員を加へて頗る盛會であつた。次會世話人とし三氏を滿場一致推薦、自己紹介に續いて相當メートルも上り、東氏よりは會として一緒に山に行くか散歩に出るかする

ことは出来まいかとの提案も出た。

結局先づ次回有志晚餐會は東氏の希望をも考慮に入れて出来れば少し遠出しやうと云ふことに決定して午後十時散會した。次會世話人左の通り

佐武 正一
高橋文太郎
飯塚篤之助

當日の出席者左の通り

島山 佛成 高頭仁兵衛 黒田孝雄
谷口 現吉 角田 吉夫 加藤泰安
高橋文太郎 廣瀬 甚吾 島田 巽
山内 豊中 東 良三 吉田竹志
佐武 正一 石原 巖 松方三郎
額田 敏 奥 貞雄 小島久太
佐藤久一郎 田口 一郎 三田幸夫
飯塚篤之助 渡邊 漸 塚本繁松
今井田研二郎 (三田)

新着圖書

登山とスキー 五月號 黎明社
ケルン 同 ケルン編輯室
山小屋 同 明文堂
野鳥 同 梓書房
寫眞月報 同 集林書房
地學雜誌 四月號 東京地學協會
山岳講座 第六卷 共立社
霧の旅 四八 霧の旅會
紫岳 五 静岡高校紫岳會
The Geographical Journal Apr. II 1936
The Scottish Mountaineering Club Journal Apr. 1936
Natural History Apr. 1936
The Journal of the Mountain Club of South Africa 1935
Mountaineering Journal Mar./May 1936
Appalachia Apr. 1936

The Prairie Club Bulletin Apr. 1936

Trail and Timberline Mar./Apr. 1936

1936

Die Alpen Apr. 1936

Rivista Mensile Mar. 1936

Revue Alpine 3e Trim. 1936

S. T. F. Nr. 3 Apr. 1936

De Bergids Apr. 1936

Bulleti Del Centre Excursionista

De Catalunya Mar. 1936

Unio Excursionista De Catalunya Apr. 1936

1936

Unione Ligure Excursionisti Feb. 1936

Planinski Vestnik Stev. 4 1936

購入圖書

G. F. Girard - A Pic Dolomites
Borchers - Die Weisse Kordillere
Collet - The Structure of the Alps

會報投稿規定

◆原稿は山岳に關する研究、隨筆、紀行、消息の類に限りります。

◆原稿締切 毎月五日

◆原稿用紙は十六字詰のこと
用紙御希望の方には會から御送りします。

◆原稿は特に御希望なき限り一切返却致しません。

◆原稿の取捨は會報編輯係に御委せ下さい。その他編輯上の一切の事項は編輯係が全責任を負ひます。

山岳圖書展覽會目錄別冊

定價 並製金五十錢也(送料)
上製金壹圓也(四錢)

「山岳」合本用表紙

- 一、上質バックラム(灰青色)
- 二、背、山岳第何年西曆を押す。
- 三、ビラは兩面に會章を押す。
- 四、前後見返し茨木畫伯筆。
- 五、一年分合本用表紙のみを所要の場合、五十錢(送料本會負擔)
- 六、雜誌を本會へ送附される場合製本料共一圓(返送料本會負擔)

「會報」綴込用表紙

- 一、ビラは濃綠色レザラ、會章押捺
 - 二、背は濃紺色クロロス。
 - 三、代金四十錢(送料本會負擔)
- 御入用の方は振替又は小爲替にて御申越下さう。
- 「會報」合本
一、一號より五十號までの合本表紙出來。
- 二、體裁會報綴込用表紙に準ず。
- 三、代金一圓(製本料、送料共)

振替口座東京四八二九番

昭和十一年五月廿五日印刷
昭和十一年五月廿九日發行

發行所 松方三郎
編輯兼印刷者 逸見眞雄

印刷所 多木印刷所
東京市小石川區戸崎町一三

發行所 日本山岳會
東京市芝區平町一(二丁目ビル)
電話・芝一六四九番
廣告一手取扱 進恒社
電話・四六五四番